



出会ってから2週間

殉は、今では私の毎日に欠かせない存在になっていた

彼には私の『声』が聴こえた

とっても不思議なことなのだけど、今では何もしなくても意思の疎通が出来る彼を誰より信頼している

そして今日もまた…

「ヤァ」

いつも最初の一言は『ヤァ』から始まる

お気楽なんだか親しみ易いんだか

「カナちゃん、今日は外へ出ないの？ 燕の子供達が随分と大きくなったよ、一緒に観にいかない？」

まるで小さな子供を誘ってるみたい

これでも高校三年生よ、そりゃあ躰だって胸だって、普通よりホンの少し小さいかも知れないケドさ

あれ？ 彼が顔を寄せてきた

もしかして・・・

◇

殉がひそひそ声で呟いた。

「ムネは関係無いと思うけどなあ」

「(バカッ！ そんな事まで聴かなくてイイのっ!!)」

「聴こえちゃうんだからしょうがないだろ、聴かれたくなかったら頭で想わないでよ」

照れ隠しなのか、珍しく殉がふくれっ面で言い返した。

「(仕方無いじゃん、ジュンには私の考えてる事は全部お見通しなんだから)」

「そりゃそうだけどさ…」

ますます膨れ上がる顔を観るのが愉しくて、もう少しダダをこねてみる事にした加夏子は片方のホイールを押して彼に背を向けた。

「ゴメン… 怒った？」

「(知らない)」

.....

「僕、いつも嫌われてた。この力のせいで」

「（えっ？）」

彼の口調が急に重苦しいものになり、今度は加夏子の方がドギマギしてしまう。  
暗く沈んだ声は、いつも明るく話し掛けてくれる殉からは想像出来ないものだった。

「親からも親戚からもバケモノ扱いされていたんだ。サトリっていう妖怪なんだそうだよ。そうやって怖がられて、みんなから放り出された僕を面倒見てくれたのは兄さんだけだった」

思いもかけない話に、加夏子は返す言葉が見つからなかった。  
声とは裏腹の乾いた横顔が、逆に深刻な内面の懊悩を表しているようで痛ましかった。

「（お兄さん、いまどこにいるの？）」

「判らない。でもきっと帰ってくる… きっと」

彼が呟いた。

二人が運命の皮肉に気付くのは、まだまだ先のことであった。



突然、棒のように倒れた彼女をトレーナーが抱え起こした。

「いかんっ！ 発作だ、先生を呼べ！」

「はっ、ハイ！」

「クッション持ってこい！ 気道を確保するんだ！」

「銀さん、呼吸が止まっています」

「緊急蘇生だ、人工呼吸始めろ！」

「はい、人工呼吸始めます！」

若いトレーナーが呼気を吹き込む脇で、銀さんと呼ばれた中年のトレーナーが心臓マッサージを始めた。

「一、二、三… バイタルは？」

「ありません」

「続ける」

その時、騒ぎを聞き付けた看護師が一人、リハビリルームに飛込んできた。

恵美子だった。

「銀さんっ！」

「エミちゃんか。まだ、AED（簡易除細動器）を持ってきてくれ、早く！」

「わかった」

全自動化され、医師以外の者でも扱いが容易かつ認められているAEDは、大病院や空港などの施設には至る所に設置されており、医師や救命士の到着を待てない一刻を争う緊急事態に備えてあった。

オレンジ色のケースを持って恵美子が戻ってきた。

「自発呼吸は？」

「駄目だ、やろう」

加夏子の着衣の前をはだけ、恵美子が胸と脇腹に電極を張り付けた。

「いきます、離れて！」

トレーナーの二人は、加夏子から離れると同時に両手を上に挙げた。

「スイッチいれます！」

低いチャージ音が響き始める。

…逝くなよ、嬢ちゃん…

ボソリと銀さんが呟いた。

◇

また風が吹いてる…

加夏子がゆっくり目を開けると、病室の白い天井が正面に見えた。  
開け放った窓からは、カーテンを微かに巻く風が部屋の中へと流れ込んできていた。

また何かあったんだ、わたし

初めてではなかった。

こうやって、気がつくときベットに横になっている事がしばしばあった。  
深い眠りから覚めた時のように、動かない足はおろか腕や躰まで物憂気にだるく、すぐにはいうことを聞いてくれない。  
息をするにもユックリやらないと咳込んでしまうのだった。

「お目覚めね、気分はどう？」

こしばらく私を担当している年配の看護師が、食事を載せたトレイを持って入ってきた。

「大変だったわね。いつもアナタは突然なんだから。みんな大騒ぎだったのよ」

何がタイヘンで、何が突然なのか、そんなの判るわけじゃない

なんだかイラっときて、加夏子は目をすぼめた。

いつもこの部屋で目覚める。

いつも誰かが言う、大変だったと。

そしていつも、何ひとつ覚えていないのだ。

「そうそう、貴方の担当は今日から違う人になるから。後で紹介するわね」

口調は穏やかだが、看護師の顔はどこかホッとしているように思えた。

口がきけず筆談すらおっくうがる自分が看護師達に好かれていないのは知っていたが、他人のあからさまな感情は加夏子をいつも不安にさせた。

それすら他人には判る筈も無かったのだが。

「コンニチハ、もう起きているのね」

開いていた病室のドアから見知らぬ看護師が入ってきた。

歳は二十代後半位であろうか。潔癖そうな光の強い目が加夏子を正面から覗き込んできた。

「やだ、もう来ちゃったの。今あなたの話をしていた所なのに」

「和田さん、申し送りはもう済んでいますよね。手伝って頂いたのは感謝します」

睨みつけるような視線のまま、若い看護師が深々と頭を下げる。

「あとは私が」

「おおヤダ、年寄りをそんなに早く追い出したいのかねえ〜」

相変わらず笑顔だが、さっきより露骨に不快感を見せた年配のほうの看護師は、アト宜しくと言い捨てて部屋を出ていった。

このヒトも同僚達からあまり好かれていないのだなと加夏子は思った。

「夏は好き？」

唐突に若い看護師が話し掛けてきた。

「私は嫌い。ついでに言っておくけど、今のアナタも嫌い。傷付いた自分を『歩けない』と思い込んでるアナタも、ね」

覗き込む目が光を増していた。